九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

旅行報告書

成瀬, 正一

https://doi.org/10.15017/2557045

出版情報：文學研究. 16, pp.31-76, 1936-07-28. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

旅行報告書

成瀨正一

成瀨教授は、昭和十年一月、カーン財團派遣員として、歐州へ出發、主として佛國の文化と民族精神との視察、研究に精進し、同年十一月無事歸朝せられた。爾來、財團に提出すべき和佛兩文の報告書の筆を執られ、和文報告書は昭和十一年三月完了したが、佛文報告書は遂に完成に達せざるうちに、四月十三日溘焉として逝かれた。こゝに掲載するものは、教授の逝去後、印刷して財團に提出せられた和文報告書である。謂はゞ教授の絶筆となつたものである。

昭和十年一月二十六日門司解纜佛蘭西に向ふ。余としては西征既に三回目なり。三月六日巴里着、爾來九月下旬まで約六ケ月間同地に滯在、その間主として、佛國の人情風俗及文物一般の狀態を視察見學して、十一月十五日歸朝せり。

巴里到着早々財團設立者たるアルベール・カーン氏を訪問して敬意を表すると同時に、視察方針に就きその意見を求めたるところ、別に何等の制限規則を設くるの要なしとのことなりしを以て、余は自己の欲するまゝに、敢て他國を旅行することなく、巴里逗留と決し、努めて佛國の社會人情を研究することゝ定めたり。

蓋し財團設立の趣旨は、「派遣員をして海外諸國に旅行せしめ、その國々の一般狀態及人民生活の狀況を視察し、

以て自國の教育に資せしむるを以て目的とする」にあり。この主旨はかねてより西洋文學の研究を以て專門とする余の、終始念願とするところに外ならず。余窃に思ふに、日常、日本人たる青年學生に對し、一見無緣の閑文字とも見ゆる佛蘭西文學及佛蘭西思想を講ずるは、無用蛇足の業にも似たれど、翻て考ふるに、一國の文化を向上發達せしめんには、他よりの適切有效なる刺戟影響に俟たざるべからず。日本文化も亦もとより然り。若し世界各國の文化にして、相互の刺戟影響なく、唯徒に文化的國境を嚴にし、各自孤立獨居を旨とするに到らん乎、過去幾世紀の間積まれたる世界人智の寶庫は一朝にして廢屋と化し、文明進歩は一瞬にしてその影を沒し、吾人は、忽にして、未開野蠻の太古の狀態に逆戻せんのみ。されば講壇に立つに際し、常に余が念とするところは、佛國文化の好影響により、益益日本文化をして琢磨するところあらしめ、將來吾祖國に、優秀なる文明の生るゝ素地を造る一助となし、以て世界人文に對し、何物かを貢献するところあらしめんとするに外ならざるなり。

從て早くより此の點に着目し、如上の趣旨に基く財團を設立したるアルベール・カーン氏の達識に對しては、敬服措かざるところなると同時に、今回機會を獲て派遣員たるの光榮を擔ひたる余は、先づ第一に同氏に對し、深甚の敬意と無限の感謝を捧ぐる義務あるを信ずる者なり。

余が派遣せられたる主旨は、從て、謂はゞ受働ならざるべからず。卽日頃の研究を發表し、若くは講演してその價値を公に問ふが如き能働的活動は、その目的とするところに非ず。換言すれば、暫く教授たるの職を去て、過去の學生時代に歸り、忠實に視察研學することを以て主眼とせざるべからざるなり。故に滯佛中、二三公開講演をなすべき勸告を受けたりと雖、進で承諾講壇に立ちたるは、僅一回にして、他は凡て民情視察に終始せり。卽、五月二十二日

巴里大學文學部長ドラクロワ博士の司會により、同大學講堂に於て「モンテーニュと東洋の悟道」(Montaigne et la Sagesse d'Extrême-Orient) なる題目の下に一場の公開講演をなせり。その要旨は、十六世紀の哲人モンテーニュの言行が、偶然ながら、期せずして東洋古賢の所說に一致せることを述ぶるにありしが、余としては、聽衆に對し、相應の感銘を與へたるものと自信せり。出席者は主として、文學部教官諸氏及男女學生、その他市內有識階級等にして、大學に於けるこの種類の講演としては、先づ盛會なりしものと信ず。次で六月十七日、巴里大學講堂に於て、大統領及文部大臣臨席の下に、文豪ヴイクトル・ユゴー歿後、五十年記念祭擧行せらるゝことあり。各國代表多數參列すべく、吾國も亦、駐佛大使佐藤尙武氏、東京帝國大學名譽教授姉崎正治博士、それ〴〵日本帝國代表帝國學士院代表の資格に於て出席あるべきにつき、余に對しても、大學代表者として出頭すべしとの命に接し、服裝を整へ參列せり。出席者は、官邊の有力者、種々なる文化團體の代表者及外交團を始とし、公衆四千堂に溢れ、非常の盛會なりし。

余としては、多少にても公的の性質を帶びたる席に臨みたるは、以上二回のみにして、終始一貫觀察者の立場に於て佛蘭西の社會狀態を見學せり。蓋し一國の文學は、その國民性一般の表現なること勿論なり。故に佛蘭西の國民性を識ることは、その文學の研究に專念する余として、不可缺の緊要事ならざるべからず。

余が最初巴里の地を踏みたるは、時恰も歐洲大戰の末期に當り、大正七年の春なりし。當時は、國を擧げて侵入獨軍の防禦に力を竭し、巴里亦日夜敵飛行機及長距離砲の攻擊を受け、市中の空氣何となく陰鬱にして、文化方面の事業も稍閑却さるゝ傾ありしが、次いで大正十年再度の訪問に際しては、戰爭の脅威全く去り、殆ど完全に平時狀態に復歸せる佛國を見學し得たり。この時は滿四ヶ年滯在して、十分視察の目的を達成せり。今回の滯佛は僅六ヶ月にして

多少短きに過ぐる憾なきに非ざりしも、余としては、既に第三回目の訪問なりしを以て、比較的要領よく見學し得たるものと信ず。

由來佛國人は常に世界文化の先頭に立ち、流行の魁となる一面あるに拘らず、又同時に全くこれに反し、自國の傳統を尊び、古來の習慣を墨守する半面を有するは、識者の屢々指摘するところなり。これを余自身の經驗に徵するも、前後三回の訪問に於て、各回とも國民一般の精神生活に就き、著しき相違變遷の跡を認めざりし程なり。即第二回目は初回の印象を強化し、今回の訪問は更に前二回の印象を一層強化したるに過ぎざりし。共產思想フアツショ運動の如き過激極端なる傾向は、一隅に思想的現象として僅に存在するのみにして、國民大衆の間に實際的勢力を得ることなく、人皆概して、健全なる中庸精神に基き生活せるが如し。然れども佛國は英國の如く、商工業を以て立國の基となさず、從て一般的國民生活は利益の追及に終始する者に非ざるを以て、その所謂中庸精神なる者も英國流の常識的功利思想に由來するものに非ざることを認めざるべからず。蓋し佛國は他の列强と異り、二十世紀の今日に於ても、猶依然として農本に國の基礎を置くを以て、その國力、一見英吉利の如き最富强國に比肩し得ざるに似たれど、その代り、現下の如き世界的經濟危機に際しても、その國民生活の安定は、物心兩方面とも、打擊を蒙ること比較的鮮少なるに因るものと察せらる。所謂佛國の根强さは、その農業立國の結果として、民に恆心あるに因るものと解すべし。近時吾國に於て商工業盛に起り、往々先進諸國の壘を摩するに到りたるは、大に意を强うするに足るものありと雖、將來治國の大策として、商工を先にし農を後とするは、その利害果して如何あるべき乎。余の如き門外の徒にとりても、目下に於ける佛英兩國の狀態は、興味ある問題を提供するに非ざるやを想はしむ。

この農本政策は、佛人の一般的性格の根柢を形成せるが如し。農民は商工業者に比して土に親むこと多く、從て、

抜き難き鄉土愛を抱くを常とす。故にその特徴として、深き愛國の情を有す。人屢々佛人の愛國心强きを云ふ。この點に就き余も亦同感なるが、凡てこれは鄉土愛に由來するものと解すべきなり。故に當然の歸結として佛人は、祖先を敬愛すること厚く、家族同胞相愛すること密にして、この點に於ては、全歐洲人に冠たるの特色を有す。この點に關し、余自身の體驗せる一話柄あり。余の年來の舊知に、英人の一老夫婦あり。兩人の間に生れし二男二女皆賢なりしが、長男は遠く支那上海に於て通信事業に從事中不幸病死し、長女は嫁して南阿喜望峰の殖民地に住し、二女は日本の外交官と婚して萬里の異鄉に家を營む。かくして老夫婦は、唯一人殘れる二男を相手として、倫敦に老後を養へるなり。然るにその二男も、やがて、その勤務する會社の命にて、新西蘭土支店に於て働くべき次第となり、近々渡航のことに決す。然るに不運にも丁度その時、老母重病に罹り、種々手を竭すと雖恢復の見込なく、終に危篤狀態に陷る。日本人の考として余は、末子は少くともその出發を延期すべしと思ひ居りしに、意外にも彼は、瀕死の老母とやがて鰥夫となるべき老父を殘し、豫定通り出發せり。その時彼、「遺憾なれども止むを得ざるべし。余ありと雖、助命の術あるに非ざれば」と呟き、父も亦末子に對し、會社の命に忠なるべきを告げ、決然故國を去らしめたり。而して却て去り行く子を憐み、「憐なる子よ、彼は再び母に見ゆるの機あらじ」と語りぬ。その時の言葉

Poor boy, he will never see his mother again.

は猶余の記憶に新なり。義務約束に忠なりと云はゞそれまでならんも、日本人たる余には、末子の行爲解し難く考へられたれば、その後このことを佛人の一友に物語り意見を求めたるところ、彼も余に贊成して、英人の振舞を冷血無情なりと擯斥し、佛人ならば當然出立せざりしならんと語れり。英人が世界を征服して一大殖民帝國を造るに反し、

佛人が常に殖民に失敗するの謂れなきに非ずと、余その時思ひぬ。

佛人がその鄕土を愛するは誠に偶然ならず。佛人の好で用ふる douce France（美はしの佛蘭西）なる愛稱は、一度にても佛蘭西の地を踏みし人なれば、誰にてもその決して空名ならざるを發見すべし。ヴイクトル・ユゴーの名戲曲「エルナニ」中に、次の如き一句あり。

若し我天帝にして二子あらば、長子は天に神たらしめ、次子は佛蘭西に王たらしめん。

Si j'étais Dieu le Père et si j'avais deux fils
Je ferais l'aîné Dieu, le second roi de France.
(Hernani, Acte I. sc. 3)

歐洲諸國の中、佛蘭西程自然の惠厚き國は恐らく稀なるべし。氷雪雲霧に閉さるゝ北歐諸國の如き寒威に脅さるゝことなく、さりとて、半熱帶とも云ふべき南歐の暑熱烈日に苦しむこともなく、國人は皆一般に溫帶中の溫帶とも云ふべき好氣候を享受し、しかも猶四季の變化に富み、地味豐沃にして農產豐なるに加へて、地震洪水その他一切の天災の憂全くなし。山あれどそは突兀不毛の岩山に非ず。多くはたゞ緩漫なる傾斜をなす丘陵に過ぎず。高所に立ちてこれを遠望すれば、宛然緩なる波濤の起伏するに異らず。主として葡萄麥の類を植ゑ、凡て入念に耕作されあるを普通とす。その裾を流るゝ大小の河川は、皆流緩にして青綠の水藻水底に生じ、小魚その間に戲れ、彼所に五六軒此所に五六軒と赤瓦の農家點々たるは、誠に平和そのものゝ眺望なるべし。國全體として火山性に乏しきを以て、吾國の自然の如く、奇景絕景に富み、風光明媚とは云ひ難けれど、その代り、豐饒平和の裡に悠々生活を樂しむ餘裕振は、

隨所の田野に溢るゝを見る。佛蘭西の自然は、景色の秀でたるよりも、寧ろ住民の安穩なる生活狀態によりて吾人の心を惹くものあり。これ蓋し佛人が家を愛し鄉土を愛し國を愛し、敢て他國に出稼するを欲せざる根本理由なるべし。從て彼等の愛國心は、英人の如く國利に發するに非ず、獨人の如く尙武權力に由來するに非ず、要するに、この美しき土地に執着する農民の鄉土愛にその基礎を置くものと斷じて大過なかるべし。こゝに於て余は、佛人の愛國心を以て、歐洲各國民の愛國心中、最純にして最健全なるを信ずるものなり。

この美しき國に住せる佛蘭西人は、大部分恆產を獲て恆心あり、常に中庸の精神に生き、明朗なる心の持主なるを普通とす。この明朗性なる一事は、蓋し佛蘭西精神の重要なる一面たるを失はず。例を文學戲曲に採るも、歷代の大作傑作と稱せらるゝ代表的作品の中、露西亞文學に散見する如き暗澹陰慘なる調子はその片影だになく、又、北歐諸國に現るゝ如き幽靈亡靈の類を取扱ひて主材料となすものは、一篇も發見し難き程なり。余の知る限り、ヴオルテールの悲劇中僅か二三の例あるに過ぎず。「セミラミス」「エリフイル」(Semiramis, Eriphyle) の類是なり。しかも此等の作は、評家の凡て一致する如く、沙翁の悲劇「ハムレツト」「マクベス」等の摸倣に過ぎず、ヴオルテールの諸篇中、寧ろ駄作として代表的なるものに屬す。元來實質的現實的の頭腦の主なる佛人は、亡靈と云ふが如き神秘的抽象的なる事象を考ふること甚稀なり。ごく一部のセルト系の者を除外すれば、佛蘭西には、幽靈に關する傳說すら存在せず。千年に餘る文學史に於ても、亡靈を材料とせる者あるを耳にせず。太陽の光眩き佛蘭西は、かゝるものゝ出現する餘地なきものなるべし。所詮これ等は、夜の國北歐の現象なるべし。何よりも先づ佛蘭西は日光の國にして、その文學は溫帶現實の文學なり。嘗て評家ブリユヌチエールが、何故に佛蘭西文學は、世界各國の文學中、最多く他

國に愛好者を有するやとの問に答へて、「そは佛文學者が除外例例外的の事象を取扱ふことなく、常に、萬人向の最人間的の材料を採る故なり」と言へるは、この意味に於て首肯に値すべき乎。これ所謂 Clarté française（佛蘭西の明朗性）の一面にして、佛蘭西文化が歐洲に君臨し世界を風靡する主因は、實にこゝに存するなり。加之、既述鄉土愛に基礎を置く愛國心は、自己の居住する地を美化し、やがて佛蘭西全國を美化せずんば歇まず。王朝時代にありても帝政治下にありても、帝王は巴里を美化することにより、人民の愛情を繫げるは、歷史によりて明なり。國民個人も亦、各自の住宅を快適化し美化することに努力せるを以て、余の知る限り、佛蘭西人の家庭一般は、全歐中、最合理的に生活を享樂せる樂園の趣あり。

こゝに於て余等外人の觀察者にとりて、感嘆禁じ得ざるは、一般佛蘭西人の生活法の巧妙さなり。佛人が概して勤勉にして貯蓄心に富むことは、多くの識者の說くところなれども、吾人の注意すべきは、彼等の生活法の妙諦が單にその點に止るに非ざることなり。單に刻苦精勵とか質素儉約とかの性質ならば、無論これ等は、佛人のみの獨占せる特質に非ず。他にもこれ等の點に於て、優れたる特徵を有する國民多かるべし。或は灼熱せる沙漠の烈日下に、或は半歲氷雪に閉さるゝ極北の寒地に於て、孜々として働く殖民英人を見よ。粗衣粗食に甘んじ勉勵倦まざる獨人を見よ。吾日本の同胞もこの點に於ては、他國民に對し多く讓らざるものあるべし。されど佛人の特異點は、單に勤勉とか努力とか云ふに非ず。他國民の多くが、毫も生を樂むことを知らず、たゞ傍目もふらず機械の如く働きて一生を終りつゝあるに反し、天性生活法の妙諦を具有せる彼等佛人は、特に富めりと云ふに非ざれど巧に緊緩を案配して、大に働くと共に大に享樂せるなり。余の知る限り、珈琲店、居酒屋、舞踏所の如き娛樂機關の設備豐富なる點に於て、佛

蘭西は正に全歐に冠たるものなるべし。一日の仕事を終へたる勞働者の一群が、珈琲店に若干の錢を散じ、赧顏して仲間と愉快氣に放談し、百貨店その他の大商店に働く所謂 midinette なる女事務員連が日曜祭日の休日に、大家の令孃然たる晴着を纏ひ、三々五々公園に嬉戯するが如き情景は、吾人外國旅行者の眼を惹くこと稀ならず。かゝる光景に接する毎に吾人外國人たる身にも、如何に彼等が命を樂しめるやを察知せられ、共に誘はれて、心春めくを禁じ得ざるなり。この點に關し余は知己某の好謔を想起せざるを得ず。引例少々卑近なれども、よくその間の消息を語るものあるを以て、敢て一言述置かんに、友の曰、

「吾々日本人にして英國婦人と婚せん乎、誤て氣位高き貴婦人を妻としたるに等しく、女房は終に一の裝飾物に過ぎざるべし。女權の下に吾等は平伏して、一々その御機嫌伺に汲々たるに到るべし。獨逸婦人を妻とせん乎、家事萬端一々まめ〳〵しく立働き、節儉を旨として甚好都合なれど、垢拔せぬ女中を俄に奥樣に仕立てたる如く、あまりにも粗野無骨にして下品なるを免れざるべし。然らば佛蘭西婦人は如何と云ふに、勤儉節約を守り家政を整頓することは獨逸婦人に劣らず、しかも又同時に趣味高尚にして身嗜に巧なれば、さながら愛人を妻としたる如く、夫は安じて生活を樂しみ得るなり。云々」

この言もとより一場の戯言なるべきも、戯の中に三國人の特質を物語るものと云ふべし。

余等外國旅行者が佛蘭西の地を踏み意外に感ぜらるゝ一事は、婦人運動の聲を聞くこと稀なることなり。一般日本人の常識的解釋に從へば、西洋婦人は、政治的にも社會的にも、一般の職業に於て、常に男子と同等の地位資格を享受

し、若くはこの權利を獲得せんとの運動甚熾烈なるものと信ぜらるゝが如し。日本人のかゝる印象も强ち無理ならぬ節あり。何となれば歐洲大國中には、婦人が投票によりて政治に參與するに止まらず、選ばれて代議士となり、更に進んで、大臣として臺閣に列するものさへあり。かゝる實例より推して、大同小異の生活を營める歐人一般が、大體同樣の制度下にあるべしと想像するは十分尤もなることなり。然るに佛國に關する限り、事實全くこれに反するは、吾人の一驚するところなり。大臣代議士は愚か、佛蘭西婦人は投票權さへ有せざるなり。無論參政運動が絶無の狀態には非ず。余の滯佛中も、時々、市街の要所要所に掲出されある選擧ビラの中、婦選を鼓吹せるものを見受けたることも稀ならず。中には、全歐二十九ケ國中、婦人に投票を許さゞるは、佛蘭西と土耳古の二國のみなどゝ云ふ標語を掲ぐるものさへ實見したり。されど概括的印象としては、國內一般、この問題には比較的無關心なるが如く、新聞雜誌等にも、かゝる意味の主張を見ること甚稀なり。余恰も本報告書を草する際、偶然ながら、本年度の佛國議會は、婦人に投票權を附與するの案を、二四九對一四〇票にて否決せる旨の新聞電報に接したり。のみならず肝心の婦人自身も、かゝる運動全體に對し冷淡なるが如く見受けられ、結局余としては、一部少數者の論なるべしと結論せり。現に知己の智識階級に屬する一職業婦人に對し、余自身この問題に就き試問したるところ、彼女は、選擧權を附與さるるは別に厭ふところに非ざれど、婦人が被選擧權を有するに到るは贊成せずと答へし程なり。從て總括的に觀て佛蘭西婦人は、大體現狀に滿足し、アングロサクソン系の婦人の如く、敢て政治運動に狂奔するものなきが如し。何事にもあれ進步的の事象は、常に佛蘭西に源を發するが如く思考せる日本人にとりて、かゝる事實は、眞に驚異に値する現象ならざるべからず。遮莫、かゝる狀態は余をして、二の點に心づかしめたり。

先づ第一にその結果として、佛蘭西の家庭生活は、その基礎頗る強固なり。抑家庭生活に於て、婦人が中心たり大黒柱たるべきは、洋の東西時の古今を問はず、苟も人類たる以上、動かすべからざる大事實なり。或は主婦として一家を整理し、或は妻として夫をして後顧の憂なからしめ、或は母として子女を愛撫教育するが如き任務は、婦人に課せられたる天職にして、これ決して男子の代行し得べき性質のものに非ざるなり。佛蘭西婦人はよくこの間の消息を理解し、その天職に安んずるを以て、家庭は家族の安息所たり樂園たるを得るなり。佛語にて「吾家」とか、「家庭」とかを意味する言葉に foyer なる一語あり。元來 foyer なる語は、圍爐裏とか暖爐の意にして、家内を照らし暖むる源を指す言葉なりと聞く。されば一家の中心たる圍爐裏を代表する者は、卽家庭生活の中心たる主婦に外ならざるなり。所謂婦人解放運動に從ふ者の好んで口にする標語は、卽、「男女同權」の一語なり。余も亦同權を信じて疑はず。人としての權利に男女の別あるべからず。婦人も亦人たる限り、男子と同權たるべきは論なきところなり。されど同權必ずしも同樣を意味せず。男子に伍して國會に代議員となり、臺閣に列して大臣の印綬を帶ぶるが如きは、男女同權に非ずして男女混同なり。婦人の天性を滅却すること之より甚しきはなく、識者の採らざるところなり。かくの如き弊風世界を風靡するに到らん乎、家庭生活の和樂は忽にして破壞せられ、社會は遂に廢墟の如く空漠たらんのみ。周圍の諸國がこの弊害に染み、惡風滔々たるに拘らず、獨り毅然として守るべきを守りつゝある佛蘭西婦人に對して余は、無限の賞讃を惜しまざるものなり。

次にこの運動に對して、全幅の贊意を表せざるまでも、婦人の地位向上てふ意味に於て、幾分の同情を表すとしても、何人も、この運動の下に潛む反抗思想を看過し得ざるべし。論者の好んで用ゆる「解放」と云ひ「同等」と云ひ

それ等の語はその一面に於て、反抗闘争の意を藏せるものに外ならず。心理的に之を觀れば、勞働爭議小作爭議と異るを見ず。主旨の善惡正邪は姑く之を問はずとも、社會に對する反抗闘爭の態度は、識者の採らざるところならざるべからず。同一の目的を達するにも、和協に依ると闘爭に依るに於ては兩者至大の差異あり。反抗闘爭は要するに反抗闘爭にして、見苦しきと同時に殺風景なり。婦性の優美を奪ふ之より甚しきはなし。余、女權擴張論者等が、その實際運動に於て、常にかゝる邪路を執り恬然たるを見て、日頃遺憾とせる者なるが、佛蘭西に來りて、かゝる運動の片影すら認め難きを見て窃に意を強くせり。同時に又、佛蘭西の如き西歐の先進大國が、今猶かゝる健全なる狀態を保持するを見るにつけ、祖國日本の婦人等が、西歐の風俗を學ぶに急なるの餘り、アングロサクソン系諸國の弊風にのみ染むことなく、十分心してこの問題を味はんことを切望して歇まざる者なり。

以上說き來れる佛人の諸性質——愛國心と云ひ生活法の巧妙さと云ひ婦人の優美と云ひ、之等諸性質の由て來る因を考ふるに、余は先づ知足なる性格を擧げんと欲する者なり。佛人は現代に珍しく知足を心得たる國民なり。生活法の妙諦に徹底せる佛蘭西國民は、各自それぞれ與へられたる境遇に滿足して、分相應に生を樂むことを知れるなり。想ふに物質慾には限界あるべからず。財を得れば直ちにその得たるところを資となし、更に大なる富を積まんと欲し、かくして生涯求利に營々たる商工業者を吾人は屢々目睹すべし。彼等は一生を金儲に費す者にして、老衰その職に堪へざるに到りて後漸く隱退生活に入るを常とす。かゝる種類の人は生きんがために働ける者なりや、將又働かんがために生ける者なりや、誰人もこれに答ふるを知らざるべし。然るに佛蘭西人は多少にても餘裕を得るに到れば、働く

と同時に娯樂にも若干の財を費し、悠々生活を營む者多し。而して無限に物質慾に走るが如きは、甚少き樣見受けらるゝなり。從て佛人の生活には概して餘裕あり。この餘裕を有し、否この餘裕を造り、生活內容が豐富となるやう之を巧に善用する點に、佛蘭西文化の生るゝ根源を認むべきなり。こゝに甲乙兩人の男ありとせよ。甲は百圓の月收を得、乙は假に千圓とせよ。甲の收入は乙に比し僅十分の一に過ぎざれど、一日の仕事を終れば悠々晩酌を傾け盆栽を植ゑ謠を唸り、興に乘ずれば俳諧を弄び、靜平安穩なる生活を營みてあり。然るに乙は、千圓の收入を有しながら常に業務に追はれ東西奔走席の暖るの暇なく、收入亦常に不足を告ぐと云ふが如き實例は、吾人屢々目睹するところなり。この場合人生を樂むてふ絕對的立場より觀れば、甲の方遙に生活に長じたるものと云ふべし。總括的に之を觀れば佛人は前者に屬し、後者を代表する者は英人及米人なり。卽佛人は知足の民なり。この知足なる一事こそ、學藝藝術卽文化一般の發達する第一義となすべし。古語に曰く、衣食足而知禮節と。されど右例にも明なる如く、衣食足て後の文化に非ずして、衣食足るを知て後の文化なり。國人として佛人の如きは、比較的足れるを知る者とすべき乎。

されど吾人の心せざるべからざるは、知足の半面は退嬰保守にして、稍もすれば偸安姑息の弊に陷り易き一事なり。文化國佛蘭西に於ても、かゝる現狀絕無と云ひ難きを見ては、佛蘭西の友人を以て自認する余の如きも、危惧憂慮の情制し難きを終に奈何ともすべからず。乞食行路病者は近來大いにその數を減じたるに似たれども、今猶路上に憐を乞ふ者の影絕えず、公園の腰掛に坐して漫然日を暮す者、冬日、大學の講義室美術館博物館等に無料の暖を貪り惰眠に暮す所謂 Caloliffère national の徒を認むるは、豪華比類なき大文化の暗黑面として、如何にも陰慘なる印象を

起さしむるものなり。由來佛人には、ともかくも衣食するに足る財を得れば、忽働くを止め、その利息にて坐食する者多し。又官公吏にしても恩給年限の到來を唯一の樂として勤務し、時期到れば直に職を辭して、徒食者の群に投ぜんことを想へる者少からず。これ佛人の所謂 rentier にして、rentier たることは、大部分の佛蘭西人にとりて、心窃に抱ける理想なるが如し。

佛蘭西人が比較的勤儉貯蓄の美風に富み、概して皆相當の資產を有するは、動かすべからざる事實なるが如し。これ凡て將來の生活の安易ならんことを希求するに出づる者と信ぜらるると雖、又同時に、蓄財を擁しながら非常なる吝嗇家にして、僅少の支出をも厭ふ風あり。而して一旦事金錢に關するや甚利己的個人的にして、同胞骨肉の間と雖、他人同樣なるを普通とす。從て公共社會のため私財を投ずるが如きは甚稀なり。如何なる內閣と雖、新稅增稅を企圖すれば、假令それが僅少の額なりとも、忽不評となり、崩壞に瀕する危險ある程なり。試に佛人に對し一法の支出を命ぜんか、恐らく彼は命を奪るゝ如く絕叫して歇ざるべし。しかも彼は懷中にその何千倍の金を擁せるなり。故に佛國に於ては、國民皆裕福なるに拘らず、國庫窮乏せる如き現象も決して稀ならず。各人皆多少の差こそあれ、悉それ〴〵の臍繰錢卽所謂 bas de laine を有し、筐底深く所藏せるなり。金銀の貨幣は更なり、近來は千法の紙幣さへ死藏さるゝもの夥しとのことなり。金錢に關する佛人のかゝる心理を物語る一文として余は、十八世紀の文人マリヴオー (Marivaux) の隨筆 Spectateur français を一讀せり。編中著者の當時に於ける巴里市民の風俗を寫せる條あり。著者市民一般の性癖を說いて曰、「巴里市民は大抵親切丁寧にして交り易けれども、假令交情如何に親密なりと雖、金錢上の相談を持ちかくべからず。話頭一度金に及べば、親友も忽仇敵同志の如くなること珍しからざればなり。云々」

次で著者自身の經驗なりとて一の實例を物語れり。卽著者の友人に永く巴里の一商人を知る某あり。某或時俄に金の必要生じたれば、その商人に借金を申込みたるところ、一言の下に拒絶されたり。而して借金の相談を受けたる商人は、何やら憤懣に堪へざる面持なり。著者は商人の立腹を不審に思ひ、その理由を問訊したるところ、「某氏は誠に油斷ならぬ危險人物なるかな。迂濶に信用すれば直ちに錢相談を持ちかくる故……」との答なりし故、著者は、重ねて、「親友に金策を依賴するは當然ならずや」と反問したるに、件の商人憤然として曰、「否々、某氏は私を他人より與し易きお目出度屋と思へるなり。云々」

この引例は十八世紀の挿話なれど、事金錢に關する限り、巴里市民の心理は、二百年後の今日に於ても何等異るところあるを見ず。

この金錢に關する消極的態度に關聯して想起さるゝは、巴里人の產兒制限なり。巴里人、殊に上流巴里人は、多く子女を產むを好まざること顯著なるため、產兒制限の弊風盛なるは周知の事實なり。余自身の經驗を以てするも、相當の年齡に達せる知人中、三人以上の子女を有する者甚稀なり。かゝる結果として、過去數十年來、佛蘭西に於ける總人口は、減少せざるまでも、その增殖率遲々として遠く列國に及ばず、國家の一大問題となりつゝあり。殊に南方に於ては伊太利、北方に於ては獨逸の兩强隣を控へ、此問題は益々重大化せんとする傾向にあり。余嘗て一佛人知己に對し、不增殖現象は、自然の結果なりや人爲的結果なりやを問訊したるところ、彼は率直に、その現象が後者に起因することを認めたり。彼偶々十二歲になる男兒一人しか子なき故、余更に「然らば君もその仲間なる乎。何故一人の子しかなきや」と問ひしところ、平然として、「金がかゝる故」と答へし位なり。余更に「然らば佛人はやがて自滅すべ

き國民たるべし。君この事實を認むるや」と反問せしに、無言のまゝ双肩をすぼめて、「止むを得ず」と返事せり。而して稍ありて想起したる如く附加して曰、「然れども我に多産の百姓あれば大丈夫なり」と。この答を聞き流石の余も思はず苦笑を禁じ得ざりし。かゝる弊を矯めんため、歴代の政府も、種々努力を怠らざるが如し。例へば、子女多き者に對しては税金の輕減を計り、或は船車の切符を割引して發賣するが如し。又毎年學士院（Académie française）は Cegncq-Jay 賞と稱し、全國九十縣の最大子福者九十人に、各二萬五千法宛の賞金を附與して産兒を奬勵せる程なり。試にその受賞家族表を見るに、その多くは農民にして、普通十五六人の子女を有し、中には一夫婦にして二十人の子を産める者さへあり。されどこれ等は皆例外的事實に屬し、不增殖の大勢は、終に如何ともすべからざるが如し。

これ等の病弊は、佛蘭西として、既述知足の一方に於ける暗黑面と認めらるゝものなれども、國家の健全なる發展のためには、何れも、致命的の大缺陷なるが如く信ぜらるゝものなり。然れども事實はこれに反し、佛蘭西は、過去に於ても又現在に於ても、歐洲に於ける一流大國としての地位を保持せり。又近き將來に於ても、容易にこの地位を失墜するが如き形勢を認めず。否反對に最近は、英國の衰運に反し、却て隆盛に赴くが如き勢を示せるに非ずや。皮相的の觀察者にとりて、この矛盾は、蓋し解きがたき謎たるべし。無論この點に就ては、既述農業立國の政策に由來する堅實性を主要因として擧ぐべきものと信ぜらるゝも、今一つ、別個に考慮すべき歴史的事實の嚴存するを忘るべからず。卽彼等佛人が、歐洲列國の住民中、その何れよりも、國家として、國民として、又民族として、豐富なる經驗を保有せる一事なり。試に見よ、古來歐洲の天地に於て、戰爭若くは革命の如き大事變の勃發したりし時、佛國が、直接間接これに干與せざりしことありや。佛蘭西本土が擾亂の舞臺となり、都が敵の馬蹄に蹂躙されたることも

何回なるや知らず。佛兵が敵國を席卷し、その都を陷れたる如きことも擧げて數ふべからず。實に佛蘭西人は、戰爭革命の如き大事件に就きては、凡ゆる榮辱を味ひ、最豐富なる體驗を有する國民なり。且又、永く王政の治下にありしと雖、又一轉して皇帝を戴きしこともあり、更に再轉して自由なる共和政治の布かれしことさへあり。內亂紛爭の經驗も一再にして止らず、凡ゆる波瀾を味ひ、幾多の鍛錬を經來れる者が、現在の佛蘭西國民なり。加ふるにその都巴里は、歐洲文化の中心として、永く世界文化の王座たるの位置を保持し來れり。かく觀じ來れば佛蘭西は、亞米利加の如き建國日猶淺き青年國家に非ずして、幾多の試練に堪へ來りし老熟國家なり。人に譬ふれば齡二十の青年に非ずして四十の圓熟男なり。

一般的に之を見れば佛人は圓熟人にして苦勞人なり。その事實は、その精神生活の凡ゆる方面に於て之を認むべし。概觀するに、清淨熱烈なる理想家肌は青年者に多く、人生の荒波を泳切りし中年者は多く實際家なるが如し。前者は理に傾き後者は懷疑に傾くを常とす。嚴格なる純道德の眼より觀て、佛蘭西風俗佛蘭西人氣質の中に、贊成し難き要素の包藏さるゝことは事實なれども、その理由は、彼等佛人が、概括的に後者に屬するが故なり。卽具體的に云へば、佛人が圓熟せる苦勞人なるを以てなり。前述金錢に對する執着の如きも、その一端の表現とすべし。度重る戰亂革命政變の類は、佛人に對し、政府の信ずべからざるを敎へ、最後の力は結局金なることを骨髓に徹して痛感せしめたものなり。人生の辛酸を嘗めつくしたる四十男が、最早未來に對し大抱負大理想を抱くことなきと同樣、苦勞人たる佛人は、たゞその日を地道安樂に送るを以て滿足する者にして、それに就て先づ必要なるは金錢なることを十分承知せるなり。子女の多きを望まざる心も、矢張こゝに原因するものと考ふべし。故にかく考へ來れば、邦人旅行者

の大多數が巴里に足を入るゝや、都大路に如何はしき女性の多く群れるを見て、佛蘭西の性道德の頽廢を說き、甚しきは之より推して、輕卒にも佛國民全體を以て腐敗墮落の徒となす如きは、非常なる妄斷と云はざるべからず。佛人は理想家に非ずして實際家なり。淸敎徒（ピウリタン）に從へば飮酒は惡なり。女色は罪惡なり。故に吾人は禁酒せざるべからず。賣淫は社會より葬らざるべからずとはその敎ふるところなり。又單に生活の安易を守らんことを目的として產兒の制限を敢てするが如きは、神に對する冒瀆行爲に外ならず。公益を無視して私慾に耽るが如きは、人として非社會的態度なり。これ等理想家の非難に對し、老熟せる佛蘭西人は、双肩を聳かし皮肉の微笑を湛へて、「それも宜しからん」と答ふるなるべし。しかし彼等は、今更理想家たるべくあまりに苦勞人經驗家なるを以て、決してかゝる批評に感ずまじく、況や改正を實行せんとする如きことあるべからず。人生の經驗家苦勞人にして從て實際家なる佛人は、結局人間性一般に關し最深き理解を有せるを以て、一部淸淨派の如く、人生を美化して理想の幻影に狂奔し、若くは、不自然なる禁慾生活の福音を說くが如きは殆ど絕無の狀態なり。佛人は、人類が神の子たると同時に惡魔の子たる事實を十分承知せるなり。止むを得ざる人間惡に對しては、適宜看過するの雅量を有せるなり。卽、如何に佛人と雖、姦淫產兒制限の不善なるは百も承知し居れど、さりとてこれ等は、結局に於て如何ともすべからざる人間性の暗黑面なることをよく心得居るなり。一見文弱墮落の如く見ゆる佛蘭西人の一面は、多くその老熟性より來るものと斷じて大過なかるべし。

こゝに於て余は、歐洲大戰終末以來の佛蘭西の對獨强硬政策を想起せざるを得ざるなり。何等利害の關係を有せざる無理解なる傍觀者にとりて、佛蘭西の戰敗者に對する態度は、或は冷血酷薄なるが如く感ぜらるゝ節なきを保し難

けれど、余より見れば當然に過ぐる程當然なり。見よ、獨逸は、自身加盟してその神聖を誓約したる白耳義の中立を暴力を以て侵害したる上、北部佛蘭西に侵入し、その大部分を戰爭中占領し居りたるに非ずや。しかも世界より中立侵犯に就き囂々たる輿論の攻擊を受くるや、その首相の名により、「條約は一片の反故に過ぎず」と呼號して恬たりしに非ずや。且又その戰爭方法は、飛行機の空襲と云ひ、潛水艇による攻擊と云ひ、毒瓦斯長距離砲と云ひ、その手段獰猛殘忍を極め、直接戰鬪に干與せざりし佛人も、具さにその慘苦を嘗めたる程に非ずや。かくの如き經驗を經たる後、何人か依然として對獨平和主義論者たり得る乎。假令百千の誓約をなすと雖、條約を蹂躙して之を一片の反故に過ぎずと號する獨逸人の、窮極に於て信ずるに足らざるは火を見るよりも明なり。佛蘭西政府に對して殘されたる手段は唯一無二にして、何人がその局に當ると雖、クレマンソー、ポアンカレ流の强硬手段を執るの餘儀なかるべし。ウイルソン流の理想主義に從ふべく、佛蘭西は、あまりにも高價なる犧牲を拂ひしものと云ふべし。この大戰により獲得せる苦き經驗は、益々佛人をして非理想家たらしめたると同時に、益々實際家たらしめたるものなり。又一般的情勢より觀て、獨逸が常に膨脹的攻擊的なるに對し、佛蘭西は守成的防禦的地位にあるを以て、現在に於ける對獨恐怖心も、誠に止むを得ざる心境と同感さるゝなり。恰も余の巴里滯在中偶々臺灣に强震あり。人畜の死傷夥しとの報新聞に揭載さるゝや、知己佛人の中余に對し同情の意を表し、日本が屢々天災地變に脅さるゝを悲しむ者少からざりしが、余常にこれ等親切なる佛人に對し、その好意を謝すと同時に、「天災も誠に大禍ながら、隣に獨逸あるに優れり」と答へ共に大笑せること屢々なりし。無論この獨逸の脅威は、古語にも、「外患なければ國亡ぶ」と云へる如く、一面に於ては、稍もすれば弛緩せんとする佛蘭西の國民精神を緊張せしむるの効ありと雖、實際に於ては、常に

歴代政府が頭痛の種となり、國民一般日常戰々兢々たるは、公平なる觀察者として、誠に同情に堪へざるところなり。余としては、正直に事實を直視する限り何人と雖、佛蘭西の對獨强硬政策を、止むを得ざるの必要に出づる者と是認せざるべからざるものと信ずると同時に、かゝる境遇におかれたる友國の苦衷に對し、同情の念禁ずる能はざるものなり。

事情大體上述の如くなるを以て、旅行者の概括的印象としては、佛蘭西國民一般の生活狀態は、決して元氣旺盛活氣横溢せりとは云難く、寧ろ四十男の守成的態度を印象せしむるものあり。從て之を評して、消極乃至退嬰的なりと云はゞ大過なかるべきも、その背後に潛みその根柢を流るゝ老熟性に基く力に氣づかずして、皮相的觀察判斷を下す同胞少からざるは、余の常に遺憾とするところなり。殊に相當の識者にてありながら、表面に誤られて、不當なる妄斷を下して恬たる者多きを以て一層遺憾とするものなり。凡てが系統と秩序の形に統一さるゝ近代獨逸、乃至物質の力殆ど萬能に近き北米合衆國の如き國を視察するに際しては、正鵠なる判斷を下すこと比較的容易なるべし。何となれば、かゝる國の場合に於ては、凡ゆる事象悉簡單明瞭にして凡て一本調子なればなり。然れども佛蘭西の如き複雜なる歴史に富む國の風俗人情の核心は容易に把握すべからず。佛蘭西を正當に了解せんがためには、非常なる忍耐と努力とを必要とすべし。殊に十分佛語に通ずるを以て不可缺の條件とすべし。然るに大多數の同胞は大學教授の如き最高智識階級に屬する者すら、佛語を解する者不幸にして甚少し。その結果、彼等の佛蘭西觀は多く誤解に基くものなり。更に一層不幸なるは、彼等が殆ど常に、自己の得意とする語學、卽、英語乃至獨逸語を通じて視察する結果、

不識不識の中に英米獨の影響を受け、一種合の子的判斷を下すに到る一事なり。この點に就き余の經驗は興味なしとせず。余、巴里滯在中一畫伯と會談せしことあり。この畫伯は吾國に於ても有名なる一流日本畫家にして、恰も當時歐洲漫遊の途上にありしなり。余何氣なくこの日本畫家に巴里の印象を訊ねしところ、意外にも、言下に「自分は巴里が大嫌にて、伯林の方遙に氣に入りたり」と答へたり。美術家の言葉としてこの返事解し難く思はれたれば、余更にその理由を問ひしに、その答は誠に興あるものなりし。曰、「巴里の雰圍氣は甘たるくして宛然厚化粧したる賣女を見る如く、嘔吐を催す程嫌氣させど、伯林の方はさることもなく、莊重に落着きて地味なり」と。傳統的に枯淡風雅を愛する日本畫家として、この一言は含蓄ある批評たるを失はず。成程巴里が世界に誇る豪華なるその美しさは、純東洋の美術眼より觀れば、あまりにも派手人工的にして、確に邪道として排斥さるべき性質のものなるを以て、この畫伯は巴里を嫌ひ、却てかゝる藝術味を全然缺如せる伯林を擇びしなり。このことは純日本の美術家の一言として吾人を首肯せしむる十分の理由あり。この場合彼は、西洋藝術を玩味する用意を全然缺如せるは無論なれども、同時に又、巴里を理解せざるに似て、その實よく理解せるなり。少くとも純日本人としての立場に於て十分理解せるなり。この言葉を吐くことにより、彼は、日本畫家としての自己の立場を鮮明せるものと云ふべし。然るに生中に英米乃至獨逸の影響を蒙りたる同胞旅行者は、「佛人は淫蕩柔弱なり」とか、「佛蘭西婦人は無自覺なり」とか、さながら英獨人の口吻を眞似たる如き批評をなして平然たり。而して、現在吾國に於ては主として英語獨語を教授するを以て、かゝる種類の人多きは、余の常に遺憾とするところなり。殊にかゝる種の人は英米の新教牧師に濟度されし基督教徒、乃至新教信者の社會運動家に多きに似たり。

公平なる觀察者にとりて、佛人が柔弱なりとの評程、事實を誤ること甚しきはなかるべし。佛人は柔なるやも知れざれど、斷じて弱にあらず。若弱なりとせば、如何にして弱肉强食の修羅場たる歐洲の天地にありて、幾世紀に亘り大國たるの地位を確保し得たりや。又如何にして大革命の熱血を沸らせ、近くは聯合軍の中心として五年の激戰に堪へ、孤軍よくヴエルダン、マルヌの戰捷を博し得たりや。偶々歐洲大戰の末期に於て巴里の地を踏みたる余は、當時の興味ある經驗を想起せざるを得ざるなり。當時は戰時中のこととて、晝間は敵の長距離砲の脅威を受け、夜間は飛行機の爆彈投下を蒙り、戰況概して面白からざるに拘はらず、市中の空氣一向不安の氣あるを認めず、株式市場も立會を休止せず、學校も砲彈下に授業を續け、芝居歌劇すら平常通り觀客を擁して興行せるなり。市街に出づれば、喪服を纏へる黑衣の婦人多き中に、青年將校兵士連の、軍服を纏ひて妙齡の婦人と腕組合せて漫步する者三々五々たる有樣、これが果して危急存亡の渦中にある國乎と怪しまるゝ程の平穩さなりき。大使館に出頭すれば駐在武官、余等に忠告して曰、「目下獨逸兵は、騎兵一日行程位の距離に迫れるなり。余等は義務ある故巴里に止まり居れど、足下等は速に退京して南部へ避難さるゝを安全とす」と。佛兵を信ずる余は、この忠告を謝しつゝも敢て巴里を去らず、終に一九一八年十一月の休戰に到りしが、その頃偶然ながら吾派遣武官より興味ある話を耳にしたることあり。その話に依れば、開戰當時は、壯年血氣の現役兵を戰鬪の第一線に立たしめたるも、戰爭永引きて持久戰となるや、若年者は十分役立たざること立證され、終に最近に到りては、老年の後備兵とその位置を換へ、壯者は後方勤務となり、四十歲の老兵が最前線に立つに到れり。何となれば若年の現役兵は、元氣旺盛にして體力强健なるを以て、突擊白兵戰には誂向なれど、現今の如く戰線固定して塹壕に立籠り、敵味方數ケ月間も相對峙する狀態となりては、青壯年者

は、この恐るべき沈默に由來する精神の緊張に堪へ得ざるに到り、中には發狂する者さへ少からず。然れども老兵は體力壯年者に及ばず多少不活潑なるに似たれど、その代り沈着にして忍耐力强く、第一線の任務を遂行するに適するなり。この老兵の根强さこそ、卽余の說かんと欲する佛蘭西の老熟性に基因する底力なり。吾同胞旅行者にして、佛蘭西のこの底力に心づける人は甚鮮少なり。聞くところに依れば、吾軍部の當局者すら、西歐の戰線に於て、最後まで獨軍の勝利を信じ居りたる由なるも、若事實とすれば、甚遺憾なる誤解と云ふべきなり。余をして云はしむれば、佛人は柔なれども斷じて弱に非ず。柔にして强なる者と云ふべく、若新造熟語の許さるゝあらば、柔强と云ふべし。吾人はこの老熟性の半面として、旣述の如き沒理想的暗黑面の存在するを認むるの要あると同時に、この暗黑面のみを見て、忽佛人を墮落腐敗の徒視するの愚は、努めて之を避けざるべからず。

然らば窮極に於て、佛蘭西人の精神生活の根柢をなす者は何ぞや。余は佛人の所謂 bon sens なるものと信ず。ボン・サンスは吾國に於て普通、「明識」「良識」と譯せらるゝが如しと雖、これ等の譯語にては意味の徹底を缺く憾なきに非ず。ボン・サンスは、人生百般の問題に關し、賢明に行動すべき性質能力とも云ふべき乎。例へば、飲酒賣淫は社會に害惡を齎すことを理由として、青年國家亞米利加の如きが、法律の力を以て直ちに之を絕對に禁止せんと企つるが如き際、若し佛人ならば、かく單純に理想に馳することなく、今少し愼重なる考慮を費し、事態を十分靜觀したる上、人間性に悖らざる適當なる處置を執るを誤ざるべし。かゝる性質乃至能力こそ所謂ボン・サンスの本領にして、古昔より佛人の頭腦を支配せる生活の根本義なり。而して時代を經ると共に種々なる國民的試練を受け、旣述老熟性と相俟ちて、次第に圓熟完成の域に到達せるものなり。

さて既述せるところは、凡て皆社會人情風俗の一面なるが、次に頭を轉じて藝術學藝方面の一般狀態を瞥見せんに佛蘭西は、傳統的に西歐文化の淵源を以て自他共に許せる國なれば、その盛況眞に羨望に堪へざるの感あらしむ。巴里に入る外國旅行者が先づ眼惹るゝは、大小の街路に文化方面の偉人の名を冠せる者多きこと、及、廣場公園等にそれ等の人々の銅像を屢々見るの一事なり。偉人を記念するため、或はその記念像を立て或はその名を採て町名となすは、世界何處の國にもあり觸れたることにて、敢て珍とするに及ばざるべし。吾國に於ても、東郷通乃木坂大山町の如き街路あるは人皆周知の如し。されど如何なる國に就て見るも、常に見かくるは武將に非ずんば政治家を記念する風は、他國同樣甚盛なりと雖、特筆すべきは、之等と同時に、文人畵伯哲學者音樂家俳優各方面の學者等も、凡て洩れなくその榮譽を擔へる一事なり。余が先回訪佛當時住みたる町は Colonel Bonnet と稱し、歐洲大戰に戰歿したる一聯隊長の名を採りしものなり。その側なる廣場は音樂家の名を冠して Place Chopin と呼ばれ、更にその左側なる一街路は、十八世紀の名俳優ルカンを紀念して rue Lekain と命名されあり。今回寓居を卜したる町は、浪曼派の閨秀作家、ジョルジュ・サンドの名を冠し、これに交る大路は Avenue Mozart と呼ばれ、附近には、アルフレッド・ド・ミュッセ、テオフイル・ゴーチエ、ヴイクトル・ユゴー等、文人の名を採りたる大小の町あるを認めたり。單に佛蘭西の偉人に止らず、ミケロ・アンゼロ、ダンテ、バイロン、ゲーテ、ベートーヴエンの如き外國人の名さへ町名となり居るを見て、流石に余も意外の感に打たれたるを記憶せり。中には文化方面の偉人にして、その生存中行狀面白からず、一般市民の師表たるに足らざる如き生涯を送りし文人藝術家の名さへ大分散見せり。ジョルジュ・サンド、ミュッセ、ルソーの

如きはこの種の人ならん乎。これ蓋しその素行を問はず、その偉業を尊ぶの意に出づるものなるべし。町名地名のみに限らず、軍艦汽船を命名するに當りても、ピエル・ロチとかエルネスト・ルナンの如く、文人學者の名を以てすること珍しからず。かくの如き現象は、世界文化の王座を占むる巴里のこととて、別に怪しむに足るべきことならざるやも知れざれど、國民の文化的抱負も偲ばれて、外國旅行者に對しては、一種奥床しき感銘を與へずんばあらず。三回の滯佛中余は、偶然ながらモリス・バレス及アナトール・フランスの二大文豪の死に會へり。兩文豪の埋葬當日政府はそれ〴〵一隊の儀仗兵を派し、國葬の禮を以て之を葬りたる程なり。又本報告書の冒頭に述置きたる如く、ユゴーの如き大文豪は、歿後五十年百年を經て猶その名を記念して、それ〴〵五十年祭百年祭を擧行さるゝが如し。一九二四年は、恰も一五二四年に生れたる十六世紀の大詩人ロンサールの生誕四百年に當りたれば、その偉業を追慕して、記念郵便切手の發行されしことあるを記憶せり。これ等偉人の生家住宅は凡て國有となり、或は博物館となり或は圖書館となりて、一般に公開さるゝを常とす。かゝる事實は佛國の官民一般が、如何に文化事業を理解すること深く、之を尊敬すること厚きやを物語るものにして、吾等の美望禁じ得ざるところなり。翻て吾國を見るに、その實狀、あまりにも佛蘭西と隔絶せるを見て、誠に慨嘆の情に堪へざらしむ。敍爵の奏請を受け位階勳等を授けらるゝは、軍人に非ずんば政治家なり。近時は商人實業家すらその榮に浴する者少からず。これ等の功臣凡てそれ〴〵の榮譽に値すべきは勿論なるべきも、文化文敎方面の功勞者にしてかゝる光榮を擔ひたる者、絶無に非ずとするも、之に近き狀態にあるを見ては、日本文化のため眞に憂慮に堪へざるところなり。吾國に於ては、文敎文化方面の職業に從事する者を傳統的に輕視し、甚しきは之を河原者視したる結果、文化と政治は全く離反し、文人美術家の如きは、終に社會一般

を白眼視し、偏執の念に囚はれ、國民として恰も纖子の如き狀態にあるの實狀は、國民文化の上より觀るも、文化國日本としての體面より觀るも、甚しき痛恨事たらざるべからず。この點より觀て佛蘭西の實狀は、吾等として學ぶべき大なる教訓を與ふる者と云ひ得べき乎。

事情かくの如きものあるを以て、文化方面の諸施設の完備せることも宇内に冠たるものあり。先づ演劇方面を觀んに、巴里市内には大小數十の芝居小屋の外、四個の壯大なる國立劇場あり。その中二は歌劇演出に供せられ、二は演劇を觀覽せしむるを以て目的とす。これ等四個の演劇場は、それ〴〵獨特の特徴を有し、その方面の權威たるの位置を占むると雖、最余の興味を惹きしは、佛蘭西劇場（テアトル・フランセー）なりとす。本劇場は一名コメディー・フランセーズとも稱へられ、一六八〇年ルイ十四世の勅令によりて創設せられ、爾來主として佛蘭西の古典劇を演出して今日に到れり。沙翁イブセン等の如き外國劇を觀覽せしむることもあれど、それ等は比較的稀にして、多く、コルネイユ、ラシーヌ、モリエール等の自國作家の戯曲を上演するを常とせり。余も滯佛中屢々見物したるが、毎回特に心惹かれたるは、これ等上演戯曲の大部分が、二百年乃至三百年以前の作なるに拘らず、觀客常に堂に滿ち、靜肅裡に緊張して觀覽せるの一事なり。舞臺上に演ぜらるゝ狀景は、凡て現代を去ること遠き昔の出來事なり。希臘羅馬の王者皇帝英雄美女の類を見ることさへ稀ならず。これ等劇中の人物の物語る臺詞の如きも、現代の語法とは全く異れる古典詩形の韻文なり。謂はゞ左樣然らば式の袴着たる武士言葉に外ならず。かゝる現代と緣遠き演劇が間斷なく興行され、しかも常に觀衆を吸引し、毫も衰微の徴を見ざるは誠に一奇と云ふべし。試みに西隣英國を見よ。英人は沙

翁を有するを誇ると雖、沙翁劇を觀んことを目的として倫敦に向ふ外國旅行者は必ず失望すべし。市中かゝる舊時代の古典を興行する劇場は見當らざるべし。偶々沙翁劇を演ぜる劇場ありとすれば、そは場末の小劇場が、申譯的に、年一二回、ハムレツト、オセロの類を興行するのみ。況やテアトル・フランセーの如く、定期的に引續き、自國の古典戯曲を觀覽せしむる劇場の如き、その影も存在することなし。佛國が四個の國立劇場を有せるに、世界の富國英國政府が、國内の劇場に對し、一磅の補助を支出したることを聞かず。これ結局は兩國民の性格が根本的に相違するに基因し、一方が文化國民なるに、一方は飽くまで實利を主とする商業國民なればなるべし。佛國に於ける古典演劇の盛大は、結局一般民衆の文化愛に由來すべきも、過去に於ける自國文化をかくまで愛するの實狀は、同時に、現代佛人の心底深く、祖先の文化の活けるを物語るものに外ならず。祖先崇拜を以て宗となす吾人日本人にとりて、この點甚だ心強く感ぜらるゝものなり。されば、教養ある佛國紳士淑女は、常に古昔の美辭名句を誦じ、時に應じ折に觸れ適切巧妙なる會話措辭となり、聽者の耳を悦ばしむるを常とす。

次に、圖書館博物館美術館の設備完全せることもこれに讓らず。巴里には有名なる圖書館數個あれども、その規模最大なるは、リシュリュー街なる國立圖書館とす。本館の藏書總數は四百萬卷を突破し内容豐富なること世界に冠たりとのことなるも、最古の蒐集は既にカルロヴワンジアン諸王の手寫時代より始るとのことなれば、千二百年に垂んとする歴史を有する者と云ふべく、世界第一を誇る誠に偶然に非ず。爾來歴代の諸王の直屬たりし圖書寮の藏書は、皆擧げて本館に保存され、猶且、購買寄附等によりて間斷なく增大しつゝあるものなれば、今日に於ては、如何なる金力如何なる權力を以てしても、到底企及し得ざる寶庫となれるものなり。内容を印刷圖書及地圖、寫本、版畫、貨

幣徽章の四部門に分ち、各部それ〴〵豪華なる文明展覽場の觀をなせり。又美術館の施設も之に劣らず完全を競ひ、世界最大の文化都市に愧ぢざるものあり。ルーヴル王宮の壯觀は既に人の知るところなれば敢て贅せずとするも、近代巨匠の傑作を陳列せるものにリュクサンブールあり。佛國の古代中世史を代表するものにクリュニー博物館あり。革命時代の近世はカルナヴレ博物館により代表され、東洋の文化を語るものにギメー博物館あり。凡そ人類の產出したる文化藝術にして、巴里に出陳されざるものは一として之を見ざる程なり。かゝる壯觀は巴里のみなりとするも、國內何處の都市に到るも、常に大小の美術館圖書館を有せざるなく、この點は外國旅行者として羨望に堪へざる所なると同時に、かくの如き文明施設を完成したる佛蘭西國民に對し、尊敬措き難きところなり。

これ等の文化施設と相俟ちて完備せるは、人文自然兩方面の學究機關なり。吾國に於て、學術の蘊奧を攻究するを以て使命とする機關は帝國大學のみなり。しかも余をして忌憚なく云はしむれば、目下の狀態に於て帝國大學は、學術の研究に關する限り、漸くその使命の一半を遂行し得るの狀態にあり。何となれば、その主腦中心たるべき教授は自己の研究と同時に多數學生を指導教育すべき義務を負ふ者なればなり。大學に入學する青年學生は、それ〴〵の專門智識を學習するの基礎を、高等學校に於て準備し來るのみにして、專門學それ自身に就ては、未だ何等の智識をも有せざる白紙の青年なり。この點は法科文科の如き人文方面を志す者も、理科醫科の如き自然科學を志す者も共に一樣なり。教授は彼等に對し、三ケ年乃至四ケ年を費して、各自一週間七八時間宛專門智識に關する常識を授けて後、卒業せしむるを以て常とす。卽これ指導者教師としての教授の義務なり。教授は普通この方面の義務に時間勞力を割くこと多く、その結果、自己の專門とする學術の蘊奧を攻究する點に到りては、往々全然その餘裕を缺くこと稀なら

ず。況や猶その上、生計なる實際問題を考慮する必要あるに於てをや。之を要するに吾國の大學教授は、薄給を以て生活難と闘ひつゝ、研究者兼教師としての二重義務を負ふ者に外ならず。この點佛蘭西に於ける施設は、吾人學術に獻身する者として羨望禁じ能はざるところなり。吾國に於ては大學を呼んで最高學府となせど、佛蘭西に於ては然らず。大學の各學部は、それ〴〵各種の專門智識を授くるを以てその任務とするに過ぎず。從て純然たる學校にして研究所に非ざるなり。故に大學は文部省直接の監督下にあり、教授の任免の如きも、文相の自由裁量に依りて行はれ、決してその間、自治或は干涉を叫ぶ聲を聞かざるなり。而して學術の蘊奥を研究すべき攻究機關は、大學とは自ら別個に存在せるなり。その最著名なるは、卽 Collège de France なり。

Collège de France は一五三〇年、文化の愛護者として有名なるフランソワ一世が巴里に創設せるを以て濫觴とす。當時文教の實權は悉くソルボンヌを中心とする僧侶の手にあり、從て學術は全く教會の御用學問たるの觀ありしが王はかゝる狀態に不滿を抱き終に勅令を出して、自由なる新文化研究所の設立を企圖せるものなり。王の目標とする所は、中世紀の迷妄を脫出すると同時に、澎湃たるルネイサンスの潮流に乘じ、當時の新發見たりし希臘羅馬の古代文明異教文化を研究せしめ、以て人民の蒙を啓くにありしこと勿論なれども、之と同時に、教會至上を主義とする頑冥なるソルボンヌ流派に間接なる制肘を加へ、その專横に抗することありしことも忘るべからず。故に Collège de France は、最初王宮に直屬し、Collège royal と稱せられ、教授は凡て、lecteur royal と呼ばれ、王の直接なる庇護下にありし者なり。これ恰も美術を愛する王が、一大畫廊乃至美術館を建設せしめて、これを王室直屬となし、一般民衆に觀覽せしむるに異らず。フランソワ一世は、Collège de France を設立して、國內の高名學者をして盛に古

代文化を研究講述せしめ、國民たるものは、何等の制限なく、自由にこれを聽講するを得せしめたるものなり。故に Collège de France は、その設立當初の主旨より見るも、自由主義を標榜せる一種の公開大學なりしなり。この主旨は設立以來四百年を經る今日に到るも、何等異るところなく、依然同樣の傳統裡に存續せるものなり。たゞ開學當時は、講義題目の種類も、希臘希伯來羅甸理學等僅數科目に過ぎざりしも、爾來時代の進展と學藝一般の進步複雜化に應じ、次第に擴張せられ、現在に於ては、人文及自然科學の凡ゆる方面を網羅する綜合大學の實質を具ふるに到れり。こゝに教授たる人は、歷代皆一世の碩學にして、學者として最高の名譽を擔ふ者なり。從てその社會的地位の如きも、大學教授より遙に高く、その職に當る者は、國內の最高權威者より選ばるゝを常とす。而して教授の任命は一切教授會の合議によりて決せられ、文部大臣はたゞ申達されたる候補者に對し、認可署名を與ふるのみ。この點は吾帝國大學の慣例に似たりと雖、停年制なる者の制定なきを以て、教授は一生その職を去ることなきを普通とす。教授は現在に於ては七萬法餘の年俸を給せられ、一年凡そ四十時間の講義を行ふ義務を負ふものとす。學內の講義は凡て公開にして、老若男女佛人たると外人たるとを問はず、皆自由に聽講し得るものと定めらる。自由なる公開講義なるを以て、もとより試驗の施行せらるゝこともなく、研究論文の提出を求めらるゝこともなし。從て聽講者は、もとより學士博士その他如何なる學位稱號を授けらるゝこともなく、その他、如何なる資格、就職の便宜も與へらるゝこと絕無なり。その代り何等の智識素養なき一市民と雖、苟も文藝學術を好愛する限り、一厘の聽講料をも支拂ふことなく、欲するまゝに碩學の警欵蘊蓄に接し得る次第なり。試に現在に於ける講座種目を一見するに、文化方面は、埃及アッシリアの太古より佛英伊獨西露の如き現代に到るまで凡て網羅して餘すところなく、支那滿洲韃靼土耳古印度波

斯亞剌比亞の如き東洋文化すら遺漏なく講ぜらるゝを見る。又哲學自然科學方面に於ても、これに應じて、凡ゆる方面に亘りて缺くる所なきは、眞に世界智識の大博物館たるの觀あり。專任教授は凡て佛人なれども、有名なる學者は、外人たりと雖、客員として時々招聘してその教を聽くを常とす。吾姉崎博士も嘗て招かれて、印度の佛教美術に就て講述せられしは、吾人の記憶に新なるところなり。試に思へ、かゝる研究所の存在を許し得べき國、世界果して何所にありや。邦人が常に學術の淵叢の如く考ふる獨逸にもその存在するを聞かず。米國はもとより、英國にも存在せず。かゝる超大學とも云ふべき研究所の存在し得んがためには、その必須條件として、先づ第一に、國民一般の好學心が旺盛ならざるべからず。試に他國の首都に同樣なる研究機關が設立されたりとせよ。支那滿洲韃靼亞剌比亞土耳古埃及アツシリアの如き、實利に緣遠き諸國の文化、乃至深奥抽象の學理を攻究せんと欲する者、果して幾人を集め得べき乎。殊にその研究は何等形而下的利益を齎すことなく、攻究者はたゞ自己の好學心を滿足せしむるを以てのみ目的とすべきに於てをや。殊に學究機關としての Collège de France の立場を明にするは、その講座種目が凡て純文化乃至純理學方面に限られ、工學農學の如き應用末技の學は、一切省かれあるの一事なり。この點日本旅行者として特に羨望に堪へざるところなり。吾國に於て大學の設立さるゝことあれば、先づ醫工農法經の如き實利に直接なる關係を有する學部が、常に優先的地步を與へられ、文理の如き比較的實生活に緣遠き方面は、純粹基礎學として最純最高の學術なるに拘らず常に等閑視さるゝ憾なきに非ず。之は吾國の文化が佛蘭西は勿論他の歐洲列國の水準に達し居らざるを物語るに外ならず。甚遺憾とせらるゝ次第なり。凡そ現代に於ては、一國文化の高低は、或意味に於て、上述の如き基礎學純粹科學の攻究盛大なりや否やによりて判斷すべきものなれば、吾國も、この點に於て、他國に讓ら

ざるの進歩を遂ぐるやう熱望して歇ざると同時に、Collège de France を有することは、佛蘭西の名譽として特筆さるべきものと信ぜらるるなり。

既述にも明なる如く、佛蘭西に於ける大學の使命は、學生に、高等專門の智識を授くるにあり。碩學をして自由にその蘊蓄を傾け、國內の文化を指導せしむるは、Collège de France の目的とするところなり。然れども飜て考ふるに、この兩者とも、學生乃至聽講者は、謂はゞ受働的立場にあり、教授の所說により啓發さるゝところ大なりと雖、自ら進んで自己の研究を遂ぐるためには、その設備不十分の憾なきを得ざるべし。この方面の必要に應ずる機關として設立さるゝは、Ecole des hautes études と呼ばるゝ研究所なり。本研究所の特徵とするところは、恰も吾國各帝國大學に設置さるゝ大學院に似たる關係あり。卽學生は、各自一定の研究題目を定め、教授の指導助言と學生相互の批評とにより、不斷に研鑽を繼續し、時々自己の攻究業績を發表し、以て究學の目的を達するものなり。故にその特質とするところは、學生をして能働的に自己の研究を發表せしめ、その間各自の學的完成を期するにあり。大學及 Collège de France の設備と相俟ちて、佛蘭西文化の發展に關し重大なる寄與をなすものと云ふべし。これを吾國の學術機關に比較するに、近時二三の研究所の新設さるゝものあり、幾分改良進步の跡を認むるは、大に慶すべきに似たれども、如何せん、その設備費用も十分ならず、加ふるに、世人皆、あまりに學術の實利實用化に急にして、基礎的の諸研究は、常に忽諸に附せらるゝ憾あり。且又最高學府の稱ある帝國大學は、皆、單獨にて既述佛蘭西に於ける大學、Collège de France, Ecole des hautes études の三機關の任務を負擔し居り、教授は必然の結果として餘暇に

乏しく、概ね生活難に苦しみつゝあるの現狀なり。之を思ひ彼を想はゞ、吾國の學藝が進步して、世界の檜舞臺上に覇を唱ふるの日は、誠に前途遼遠の感なき能はず。眞に一大痛恨事と云ふべきなり。

以上の施設の外、古代及外國文化研究所として佛蘭西には、Ecole française d'Athène, Ecole française de Rome. Ecole française d'Extrême-Orient, Institut français d'archéologie orientale du Caire の四機關あり。それ〴〵雅典、羅馬、ハノイ（印度支那）、カイロに研究所を設立し、言語文學美術等の文化一般及考古學的研究に便せしめ、或は專門學者を派遣して視察を命じ、或は學徒を送りて研究せしむるを常とす。又國內の文敎を指導統一せんがためには有名なる學士院（Institut）あり。學士院は五部に分れ、各部それ〴〵の方面に於ける最高權威たるの地位を占め、國內文化に君臨し居れども、その中最著名なるは、Académie française とす。アカデミー若くは之に類似する學士院乃至文藝院とも呼ぶべき機關は、多くの文明國に大概設置されあるを以て、その存在は、佛蘭西に限る現象に非ざれど吾人は、佛蘭西のアカデミーが、他國の追及し得ざる一大特色を有する事實を無視すべからず。卽、學士院と云ひ文藝院と云ひ、この種の文化施設は、他國に於ては、稍もすればその性質一方に偏し、或は官僚的となり、或は空疏にして抽象的內容を帶び、國民大衆一般の實際的精神生活とは無緣の中に孤立して存在せる如き傾向多き憾あり。然れども佛蘭西のアカデミーにありては決して然らず。卽、他國の文藝院學士院が、屢々文藝學術の實際家を後にして、寧ろ理論家及所謂學者肌の官僚的會員のみを集むる傾向あるに反し、佛蘭西のアカデミーは、詩人小說家劇作家評論家哲學者の如き、實際に創作著述生活を營む者を多く抱擁するを以て、アカデミーの空氣は、如實に國民の精神生活を反映すると同時に、國民大衆も之に對し親密の感を抱くは蓋し自然の結果と云ふべし。之を歷史上の事實に徵する

も、苟も文壇學界の名士と呼ばるべき人にして會員たらざりし者一人もなく、現在の狀態亦然り。これに比し吾國の文士美術家の輩が、文藝院美術院の類を常に白眼視し、その員に加るを屑とせず、獨離れて自ら淸しとする風あるの實狀は、國民文化の發展より觀るも、一大痛恨事と云ふべし。佛蘭西のアカデミーは、一六三四年ルイ十三世の治下に創設せられ、爾來三百年、その主旨は、佛蘭西文化の健全なる發展を助長し、以てその進步完成を企圖するにありしが、この目的を達する一手段として常時繼續さるゝは、佛語字書の編纂なり。第一回の出版は一六九四年なりしが爾來或は新語の發生或は古語の死滅、語法の變化等により、逐次改訂を加へ、一七一八、一七四〇、一七四二、一八三五、一八七七年、計五回の新版を發行し、現在に於ても、第七回の新字書の編纂に努力しつゝあり。無論これ等の字書は、佛語の正しき理解に對し、最高の典據たるべきを目的とせらるゝを以て、言語文法等に關するアカデミーの決斷は、同時に最高の權威たるべきものとせらる。猶この外定期の事業としてアカデミーは、每年、當該年度に於て公刊せられたる劇、詩、小說、評論の優秀なるものに對し、賞金を交附し、以て健全なる國民文化の發達を奬勵せり。吾國に於ても、外來語新語の整理、文法上の諸問題等に就ては、國語調査會その他の機關設置され、その方面の施設には十分遺憾なかるべきも、アカデミーの權威とその實績は、他山の石として十分研究の價値あるものと信ぜらる。

佛蘭西に於ける文化學藝方面の施設の完備せることは概ね上述の如く、世界にその比を見ざるものあるを以て、巴里を目ざして來集する各國の學徒は、常に、門前市を爲すの盛況を呈するの樣、稀有の壯觀なり。巴里が國際的學術の府として歐洲の中心となりしは、遠く中世紀時代に始るものなり。學術文化の實權が未だ僧侶の手にありし當時に於て、ソルボンヌは事實上歐洲文化の中心にして、笈を負て來り學ぶ者頗多く、早くも巴里は一大國際都市の觀ありし

なり。就中特に巴里の盛名を馳せしむるに力ありしは、ソルボンヌ大學及これを中心として發達せる所謂スコラ哲學(Philosophie scolastique)なりとす。學術卽神學と考へられし當時に於ける現象としてかゝる事實は容易に首肯し得るところなり。爾來幾星霜を經て今日に到るまで、歷代の主權者當局等、皆各々時代の推移と要求に從ひ文化施設の整備革新を怠らず、終に現在の盛況を致せるものなれば、文化國としての佛蘭西の權威は、一朝一夕の力に非ざるなり。今日に於ても、佛蘭西が國際文化の壇上に占むる優越なる地位は毫も昔と異らず、他國の追及を許さゞる獨特の地歩を保持せるは、公平なる觀察者の皆一致するところなり。この間の消息を最雄辯に物語るは、巴里に於ける大學都市(Cité universitaire)の存在とす。大學都市は巴里の南境に位し、モンスーリ公園を正面に控へ、遠く都會の雜沓喧噪を離れ、高燥閑靜の地を占む。敷地は五十二萬坪に餘るべく、その大部分は、各國の學生館によりて占めらる。その重なるものは日英米西瑞蘭丁白等にして歐洲を網羅し南北兩米を含み亞細亞極東に及び、總計十九個國を算す。吾日本學生館も薩摩氏の寄附によりて建設され、東隅の一角を占む。世界各國中こゝに自國の學生館を有せざるは、特殊關係にある獨墺の如き國に非ずんば、大概支那暹羅の如く、その資を缺く小國なるのみ。苟もその存在を知らるゝ程の國は、悉く、巴里に遊學する自國學徒のために、こゝに一館を設立せるなり。加之大學都市居住學徒の便宜のため事務を司る中央本部あり、醫務所あり、共同食堂あり、圖書館あり、倶樂部あり、運動場あり、之等の設備一として缺くるところなし。想へ、かくの如き施設、巴里以外、世界果して何所の都に存在するものぞ。吾國人により常に學術都市の如く憧憬さるゝ伯林に建設せられたりと假定せよ。墺太利波蘭土瑞西、その他二三ゲルマン系の小國の學生は、吾日本の留學生と共に、多少集め得べきも、英米その他の大國の學徒に到りては、顧る者甚僅少なるべきは疑を

容れず。伯林に於て既に然りとせば、倫敦紐育の如き論ずるに足らざるべし。巴里に於ける大學都市の殷盛は、云ふまでもなく世界各國の學徒が、佛蘭西文化の絢爛を慕ひ、その風を望みて來り集る結果に外ならず。所謂桃李不言下自成蹊の諺を實現せるものとして、豪華なる佛蘭西文化を表象する一大記念塔と云ふべきなり。

さて以上にて余が觀察したる佛蘭西の一般狀況は、不十分ながら、ともかくその大要を盡くしたるものと信ずるを以て、最後に、吾日本と歐米との關係に就き一言附加するところあるべし。今回の滯佛中余は、偶然一九三五年七月二十日發行の週間繪入雜誌、「リリユストラシオン」を披見したるに、その中、最近に於ける日本の社會狀態一般を紹介せる一文を發見せり。文中筆者は、日本人の歐人に對する心持に言及して曰、「日本人はその開國當時より日露戰爭に到る迄は、常に歐人を畏敬し、自己より優秀なる民族と考へ居りしも、一九〇五年以後は、一變して、自國民と同等にしてその間何等優劣の差なきものと思考するに到れり。然るに一九三一年の滿洲事變に遭遇するや、その態度俄然急變し、爾後は、自己の優越性を確信して疑ざるに到れり。云々」余偶々この一文を巴里の客舍に讀み、遙に故國の一般風潮を想ひ、微笑苦笑の口邊に浮ぶを禁じ得ざりき。歐人旅行者に對して現代日本が左樣なる印象を與ふることも、强ち無理ならぬ節あり。昭和六年の滿洲事變を境とし、社會の凡ゆる方面に於ける國粹運動の擡頭は眞に眼覺しきものあり。國民並に國家意識俄然强烈の度を加へ、新聞雜誌等には日本を以て或は一等國と誇稱し或は三大國の一と號する者甚多き狀態なり。その言や壯その意氣や愛すべし。吾人日本國民の一員たる者、吾祖國が、眞實かゝる名に應しき境地に到達せんことを希求するの念、豈人後に落つるものあらんや。然れども事實は炳として日月の

如く、終に掩ふべからざるなり。眞相に盲目なる結果一時の自惚根性に魅せられて自ら得々たるは、井底の痴蛙大海を知らずして傲語するに等しく、識者の採らざるところなり。徒に卑屈なる謙遜に墮するは、もとより吾人の採らざるところなると同時に、自己の力量を信ずるは處世最上の方策なり。最近の國粹運動の多くは、國民の意氣を鼓舞しその潛勢力を喚起するの功ありと雖、吾人は屢々上述佛人筆者の所說に該當する者少からざるを見ては、衷心慨嘆の情に堪へざるものなり。その最甚しきは、吾日本を以て世界の最强國最大文明國となし、最早、外國より學ぶべきもの何もなしと呼號し、終には、學校に於ける外國語教授の廢止を叫ぶ徒の輩出することなり。これ等廢止論者の好んで口にする常套語は、學校に於て修得せし外國語は、卒業後實社會に立ちても一向役に立たず、全く無用の勞なりとなすに非ずんば、世界を知らぬ島國根性の結果として、外國語學修を以て國辱の如く妄信するにあるのみ。凡そ現在の學校教育に於て、卒業後、そのまゝの形に於て直ちに役立つ如き教科目は、何一つ擧げ得ざるや明なり。無用を叫ばゝ豈これ語學に限らんや。若し實用に緣遠きの理由を以て語學教授を廢止すべくんば、學校教育全部を抹殺せざるべからず。余思ふに學校教育の大眼目は人を造るにあり。健全なる常識を具備せる圓滿人を社會に送るにあり。歷史は自國民の傳統精神を涵養し、數學博物の類は理智的活動の素地を造り、文學藝術の教育は、情操生活を養ひ、外國史外國地理外國語等の教授は國際人たるの一面を修養せしめ、皆それ〴〵相俟ちて、一の完全なる人物養成てふ大目的に進む者に外ならず。これ恰も肉體の完全なる發達を主眼とする體操に於て、或は上肢或は下肢を運動せしめ、或は首を左右に轉ぜしめ、或は上體を前後に屈曲せしむる等、諸種の筋肉骨節の運動を適宜に案配し、以てその目的を達すると同然なり。外國語教育の必要もとよりこの例に洩れず。日本人たるべきと同時に國際人たるべきは、現代に於て不

可缺の緊要事なり。國際的情操を養はんがために外國語教育の最有益なるは論を俟たざるところなりとす。早速の實用に適せずとの理由を以てその廢止を唱ふるが如きは、教育の大眼目に氣づかざる近視者流の妄語なるのみ。鎖國排外的愛國心に基く外國語排斥論も、矢張同樣の過誤を犯す者に外ならず。假に論者の所說の如く、現代の日本文化は世界に冠たるものにして、最早他を學ぶの必要なきものとせよ。日本文化がかゝる境地に到達し得たるは、果して全く日本人獨自の力に依る乎。古くは印度及支那、近くは泰西諸國の影響なくして、吾文化果して今日あるを得たりや。この論答へずして既に明なり。他より有効有益なる好影響好刺激なき文化は忽死滅せんのみ。これなくして文化の成長發展を望むは、猶山に魚を求め海に獸を探るに異らず。外國語の修得はその文化を理解するに不可缺の要件なり。外國文化の理解は、同時に日本文化の宣揚なり。現代に於ては歐米各國中、學校に於て、外國語教授を除外する國あるを聞かず。英佛米獨の如き先進大國に於ては、殊に外國語教授に注意を拂ひ、その能率向上に細心の注意を怠らざるの實狀なり。さらぬだに東亞の一隅に偏在して一の善隣なく、外國文化の自然的好刺激を受くる上に於て不便尠からざる吾國は、語學教授を從來に倍加するの要こそあれ、廢止減少論の如き、凡そ法外無法の極なりと云ふべし。

吾日本が開國せられ、國民一般が歐洲文明と接觸し得るに到りしは比較的近代にして未だ百年を出でざるなり。然らば開國當時吾等の父祖が迎へたる洋人は、如何なる種類の人間なりやと云ふに、そは歷史の示す如く、新領土の擴張と新殖民地の開拓を目的として東洋に來襲せる侵略者の一群なりしなり。强露は次第に東漸して西伯利亞を征服し北より我を壓し、英吉利の海賊的船隊は印度及支那を侵し南より我に迫りつゝありしなり。彼等の常套手段は、始め

通商に藉口して門戸を開かしめ、後次第に侵略の魔手を伸し、終に何等かの辭を設けて、開戰征服の目的を達するにあり。かゝる事態に直面せる吾等が父祖の日常の不安憂慮は察するにあまりあり。「上喜撰たゞ四はいで夜も寢られず」とは、蓋し彼等の心境を如實に反映せるものなるべし。況や當時吾に於て自身を防禦すべき施設は凡て之を缺き居りたるに於てをや。吾人想をこゝに致す毎に、努力精勵よく困苦缺乏に堪へて、現代日本の基礎を樹立せし吾等が父祖の偉功を頌して歇ざるなり。先づ第一の緊急事は陸海の軍備を整へて外患の憂を除くにあり。故に西歐との接觸第一歩にして吾國中、軍國熱の旺然と興りしは、卽自己防衛心の結果にして、極めて自然の現象なりとす。かゝる時期は、明治三十七八年の日露戰役の頃まで繼續せり。日露戰爭は武力による西歐の脅威を殆完全に除去したるものなり。武力に次で我を脅威したるものは經濟上の壓迫なり。故に日露戰爭以來今日に到るまで、吾國民の努力は、主として經濟方面にありき。然るにこの點も國民の勤勉により幸今日あるを得、現在に於ては最早、直接他國の脅威を蒙るの憂殆絶無の狀態に到りしものと信ぜらる。故に概括的に觀れば、開國以來吾國上下を支配したる二大精神は、軍國並に致富の兩傾向なりしなり。この二大傾向の期間に於て吾國先覺者の眼が、軍國主義時代に於ては、常に西歐の軍事的方面に注がれたるは、蓋し理の當然自明の結果とすべし。當時として吾國上下の最大關心事は、國內一般の軍國化にありしを以てなり。軍國歐洲に次で吾國民の眼を惹しは經濟的歐洲なり。卽國人は凡て商工業活動の模範として西歐を摸倣輸入せるなり。

これ等の兩期間に於て直接吾等の先輩師表たりし者は、軍國獨逸と商工國英米なり。當時强敵佛蘭西を破り國運隆隆たりし獨逸は、單に軍事に關する組織制度の師表たりしのみならず、國を擧けて軍國的努力に熱中し居りたる吾國

民全般の全理想を體現せる一大强國なりしなり。故に獨逸の吾國に及せる影響は、單に軍事的方面のみに止らず、學術施設制度一般に及べるものとす。英米の影響亦之に同じ。吾の彼に學びしところは商工業經濟方面に限らず、終に文化一般に亘りしものとす。何となれば、吾國民一般の主たる關心事が經濟活動に傾倒せる限り、その方面に於ける先進國英米は、單に商工業の先輩たるのみならず、一般的文化方面に於ても、吾を導くに到るは理の當然なればなり。今日に於て外國の文學哲學を專攻する者の九割九分まで、それ〴〵英文學獨逸哲學に走る如きその好例なり。余をして云はしむれば、今日吾國に於て英獨系の學術文化が壓倒的勢力を有するは、文化それ自身の價値に因るよりも全く如上の理に由來する者なり。

故に概括的に之を觀れば、最近に到るまで、吾人は、主として軍事的歐洲乃至經濟的歐洲にのみ注目して之を學びその純文化方面卽文化的歐洲に對しては、到底顧るの餘裕を有せざりしものと解して大過なかるべし。偶々二三の先覺者の出づるあり、吾國人のこの方面に注目せしこと絕無に非ずとするも、常に、自國內に磅礴たる軍國乃至經濟思想に災されて、その眞の姿を把握し得ざりしものなり。謂はゞ吾人の態度は、眞の歐洲文化に對しては、殆全く盲目の狀態にありしものに外ならず。かゝる狀態は開國多事の際、何を措きても自國の安全を確保するの必要に迫られ居りたる吾國として、當然至極の現象なるべく、如何なる國家としても、同樣の境遇に置かれある限り、必通過すべき自然の徑路なりとすべし。然れども、今や吾國も、先人の努力と國民一般の勤勉とにより、外國の脅威を除き、先づ國家の安全を確立し得、ともかく各自皆安じて國民生活を樂しみ得るに到りし以上、吾人の西歐諸國に對する關心も、最早軍事商工業の如き一局面に限らるゝことなく、その文化的生命の全般的觀察に存せざるべからず。換言すれば、

從來殆存在を無視し居りたる文化的歐洲を、そのまゝの形に於て觀察せざるべからざるなり。何となれば、かくすることによりてのみ、光輝ある吾國の古來文化をして、將來益々健全なる發達を遂げしめ得るものなればなり。かゝる觀點に立ちて歐洲文化一般を觀るに、泰西に於て自他共に許す最大の文化國は佛蘭西なり。文化國學術國としての佛蘭西の姿は、既に詳述せるところによりて明なり。吾國が軍事經濟上に於て、それ〴〵獨英米を摸したる如く、實に佛蘭西こそは、文化的發展を企圖すべき現代に於て、最有意義なる他山の石を我に提示するものと云ふべし。

凡そ一國の文化が向上發展せんがためには、無論、先づ國民一般の自覺と努力に俟たざるべからざるものなれどもこれと同時に、有力なる外國文化の好影響を受くることを以て不可缺の要件とすべし。日本文化の今日あるは、支那及印度の刺激に負ふところ大なるべく、又希臘羅馬文化の後繼者を以て自他共に許す佛蘭西が、現代に於ても、他國の文化を適宜攝取して歇ざるが如きその好例なり。既に然りとせば、如何なる種類の文化を吸收して吾人自身の發展を期すべき乎。云ふまでもなく吾文化と近接類似せる文化を以て最適當とすべし。この點より考へて東洋人たる吾等は、先づ支那印度の如き近隣の文化を學ぶを以て當然とすべし。然れども奈何せん、現代の東洋は、印度たると支那たるとを問はず、凡て洋人の征服蹂躪に荒廢して、光榮ある過去の大文化は全く滅亡に歸し、昔日の俤を留めざるの狀態なり。日本文化はそのため、類似文化の應援を受くること一切不可能にして、世界に孤立獨居するの現狀なり。かゝる狀態に於て吾人は、欲すると欲せざるに拘らず、全く異種類の系統に屬する歐洲文化に注目せざるを得ざるなり。卽歐洲文化の中、吾國人の趣味性格に合致するものを選びて、これを適宜吸收する以外に途なきなり。かく觀じ來りし結果余は、現代及將來の吾文化の參考相手として、寸毫の躊躇なく佛蘭西を推さんとするものなり。佛人は歐

洲人として、氣風容貌最日本人に酷似し、既述の如く吾國同樣農を以て立國の基となし、人情敦厚學術美術に長じ、一般的に日本旅行者をして、身他鄉にあらざるの思あらしむ。加之文化方面の施設設備の完全は、世界にその比を見ざるものあるに於てをや。

吾國の洋學を修むる者の常套語は、「彼の長を採り吾短を補ふ」の一言なり。この言甚佳きに似たれど、心すべきは、人に自ら天性あり性格ある如く、一國の民にも亦確固不變の國民性あるの一事なり。佛人と云ひ英人と云ひ獨人と云ひ、それ〴〵の長とするところあると同時に、短とするところあるは、自明當然の事實なり。されども吾人心して觀察する時は、彼の長とするところは、彼にして始めて長たり得べく、到底外人の摸倣追隨を許さざるのみならず強て之に倣はんとする時は却て所期に反し有害の結果を招く如き實例を目睹すること稀ならず。英國紳士の高風に憧憬してゼントルマンを氣取る輩が、英國かぶれとして人々の指彈を蒙るが如きこれなり。又、四民平等自由民主を國是とする亞米利加の共和政治を觀るに、殖民地的國家米國なればこそ、始めて圓滿健全なる發達を遂げ得べきものにして、その長所を讃嘆するの餘り、直ちに吾國に移入實施を計らば、その結果の所期に反すべき說明を俟たずして明なるべし。余の常に遺憾に堪へざるは、歐米各國を歷遊する相當有識者すらこの明白なる事實に心附かず、不用意無批判に、他國の長を學ぶべきを提言することなり。甲國を旅行してその國人の沈着に感じ、乙國を訪ひてその國人の堅忍不拔の精神に傾倒し、丙國に入りてその活氣に打たれ、結局、一概にこれ等の氣風性質を採て吾短を補ふべしとなすが如きは、皮相の短見たるの譏を免れず。人自ら長短ある如く國自ら長短あり。世界各國民の特長を一身に具備せるが如き國民は、地球上何處にも在在せざるべく、又將來も存在し得ざるものなるべし。かゝる計畫は猶月を掴み

太陽を捉へんとするが如し。所詮吾人は日本國民なり。日本國民てふ生ける綜合體なり。多くの長所缺點を同時に抱擁せる生活體にして、日本人として獨自の性格を有するものなり。他國の長を採るに先ち、先づその長所が吾の消化攝取し得る性質のものなるや否やを究めざるべからず。單に美風なりとて無批判に摸倣する時は、却て折角健全なる吾組織を害ひ、終には、既有天與の長所を失ふに到るべきや必然なり。例を繪畫に採るも、西洋畫の色彩表現遠近手法に感じて、これに倣ふ日本畫家ありとせよ。幾分摸倣の効果現れたる時は、既に、元來日本畫の長たりし枯淡瓢逸を亡失するの時なり。余をして云はしむれば、米國を觀て直ちに生活の簡易化を叫び、獨逸を訪うて直ちに生活の合理化を唱道するが如きは、共に右日本畫家の轍を踏む者に外ならず。人の如き複雜なる生活體に非ずして、單なる機械的事務ならば、問題も單純容易なるべきも、一國の氣風乃至性格の問題に到りては、決して輕卒なる判斷を許さざるなり。

こゝに於て余が本報告の結論として述べんと欲するは、十分吾國民性の本體を把握して然る後、その接觸により吾文化を健全に發展せしめ得る如き外國の文化を學ぶにあり。而して余自身としては、かゝる文化は佛蘭西文化より他なきを確信するものなり。現今吾國内に國粹思想の擡頭顯著なるに從ひ、歐洲文化に對し、或は唯物的なりとか或は科學文明なりとか、種々の非難の聲絶えざるは人皆周知の如し。余としてはこれ等の非難に對し全幅の賛意を表せざるまでも、幾分の理を認むべき必要ありと思考するものなり。それと同時に、唯物乃至偏科學の缺點は、從來吾國があまりに英獨系の文化のみを偏重摸倣したる結果なりと斷ぜざるを得ざるなり。ストライキ婦人問題等は、皆商業立國英吉利を源とするに非ずや。科學文明の弊は獨逸を本家とするに非ずや。單に英米の經濟組織獨逸の軍事制度のみ

を學ぶべきを忘れ、一般の思想文化にまで之を及したる結果、吾人の當然甘受すべき刑罰なりと云ふべし。この弊を救ひ吾文化をして健全なる中道を歩ましめんが爲には、英獨文化を去り佛蘭西文化に就くを以て唯一の途とすべし。

その實行手段としては、先づ從來閑却され居る佛語を學校に於て教授するにあり。今日に於て、英語及獨語を知らざる大學卒業生は、甚鮮少なるに拘らず、佛語を識る者は總數の一割にも滿たざるべし。佛語の文化的勢力は姑く之を問はず、單なる實用的立場より觀るも、その勢力英語に讓らざるものあるは識者の凡て一致するところなり。英語は廣く世界に通用するが如しと雖、そは英米兩國と屬領殖民地に限られ、第三國は悉佛話を以て第一外國語として教授すること周知の事實なり。卽英語の勢力は、その國旗の下に限らるゝなり。余嘗て埃及小亞細亞を旅行したる時も英語の勢力の遙に佛語に及ばざるを實見したり。この點に關し昭和六年八月發行の學士會月報に、佐伯功介氏の適切なる一文あり。その要領を摘記せんに、

英語は東洋方面に勢力の大きい重要な國語で、國際性を論ずる時には勿論除外する譯には行かないが、已にローマ字を使つて居る諸國に對しては、まだまだ大した勢があるとは云へない。これは私自身もヨーロッパを旅行して見て感じて居るが、こゝに織田萬博士が大阪朝日新聞（昭和六年三月二十一日）に書かれた「國際法廷の九個年」の中から次の節を引用しよう。「英佛兩語が裁判所（常設國際司法裁判所）の公用語であることは、前に述べた通りであるが、そのいづれが主として使用されるか、この事實は我が邦の外國語教育の上に少からぬ關係があるやうに思はれるから、特に讀者の注意を喚起したいのである。舊裁判所について、先づ裁判官その人の用語から云へば、正裁判官十一名の中、英米各一名が英語を使ふほか、あと九名卽ヨーロッパ大陸六名南米二名日本一

名は皆佛語、豫備裁判官のうち支那一名を除けば皆佛語であつて結局十五名の裁判官中只三名のみが英語を使用した割合であつた。次に訴訟手續上の用語について見るに、イギリスが當事者または參加人となつて出廷した場合に、同國の訴訟または答辯等が英語で書かれ、辯護人が英語で辯論した他、大陸諸國の事件は、ドイツが一度特別の許可を受けて口頭辯論に自國語を用ひた例を除けば、すべて佛語であつて、從て判決文の大部分も佛語を正文として作られてある。さればこの一事によつて、凡そ世界中アングロサクソンの國以外には、如何に佛語が優勢であるかが十二分に證明されると同時に我國に於てこの優勢なる佛語が如何になほざりにされてゐるかが思ひ當るだらう。この他各種の萬國會議萬國學會などにおいて多くはその用語を佛語に限つてゐるのを見れば、佛語が國際語として今なほ優越な地位を保つて居る例はざらにある……。」

英語に於て既に然りとせば、獨語の世界的勢力の如き知るべきのみ。それにも拘らず吾國に於ては、獨語は佛語より重ぜられ、英語に到りては壓倒的地位を占め、吾國人の中には、可成の有識者にてありながら、英語即歐語の如く誤解せる者多き現狀なり。英米に接すること割合に多き吾國の地理的位置より觀て、英語を主として教授するは、猶幾分の理由ありとするも、獨語に到りては確に偏重の嫌あり。獨語を重ずる點に於て吾日本は、獨墺瑞西の如き獨逸語國を除き世界第一唯一の國なり。世界何れの國も佛語を第一外國語として尊重せる現狀に鑑みて、全く不可思議不可解の現象と云ふべし。かゝる不合理によりて失ふところある者ありとせば、そは吾國民に外ならず。余としては、少くとも吾國高等學校に於ては、獨語よりも寧佛語教授を主とせんことを提議せんと欲する者なり。學術文化方面の用語としての佛語の優秀性は最早説明の要なかるべし。然るに實用に於てすらその普遍性右例の如きものありとせば

吾國外國語教授の局に當る者、十分三思すべき問題なりと信ぜらる。

余佛國滯在中、屢々英獨留學の途巴里に立寄りし同胞青年學徒に面會したるが、その多くは佛蘭西の文化學術の壯觀に驚き、學生時代に佛語を學ばざりしを悔ゆる實狀なりき。中には初歩より佛語を學びて佛蘭西學を攻究せんとする篤學者流も稀ならざりしが、大部分は恨を呑みて豫定の如く英獨に赴く有樣なりし。現在の狀態を見るに、大學教授すら英獨語は識れども、佛語を識る者稀なる狀態なり。これ主として吾國人が、佛英獨の如き外國語を學ぶに巧ならず、語學の才を缺如せるに由來すべく、同時に又、學生時代に教授せられたる英語乃至獨逸語以上の外國語を、新に修得するの餘暇なきに原因するものと信ぜらる。故にその指導教授を受けて大學を卒業する青年學徒は、あたら好學の志を抱きながら、學んで有利なる佛蘭西文化の存在に心づかざるの實狀なり。この弊を矯め吾國文化の圓滿なる發達を促進せんと欲せば、現在の外國語教授規定に大改革を加へ、佛語を以て第一外國語、少くとも第二外國語となすの緊要事なるを確信する者なり。